



特集1 労働、その思想地図と行動地図

1 座談会

生産／労働／分配／差別について

天田城介・小林勇人・齊藤拓・橋口昌治・村上潔・山本崇記 附：文献

2 橋口昌治 「労働運動の社会運動化」と「社会運動の労働運動化」の交差

「若者の労働運動」の歴史的位置づけ

4 おわりに

本稿では「若者の労働運動」の歴史的な位置づけに関して検討してきた。最後に濱口[2003]の簡単な書評をし、まとめたい。

『新しい労働社会』と題された本書は、労働問題のみならず生活のあり方も含めて、議論されていくべき論点と方向性をコンパクトにまとめた良書である。労働運動論における位置づけを行うとすれば、大河内と高野によって行われた論争における「内包化」の立場に立つものだと見える。本書やブログなどの主張を読むと、濱口氏は「外で騒いでいるだけ」のユニオンより、企業別組合によって職場の民主主義が再構築されることを現実的だと考えているようである。確かに、企業別組合の変化、職場における民主主義の実現は重要課題である。しかし、「民主主義は工場の門前で立ちすくむ」と言われて久しいなか、主流の労働組合が自ら率先して民主的な組合運営、職場の民主化を進めていくと考えているのだとしたら、濱口氏を「リアリスト」と評価することはできない。実際、今これほど労働問題への関心が高まっているのはユニオンが「騒いだ」からこそであり、主流の組合は腰が重いのが現状である。また、民主的な組合運営の模索を長年行ってきたのもユニオンなのであり、そうした活動を軽視して「新しい労働社会」を展望することはできない。濱口氏が本書で論じている均等待遇や派遣労働問題は、ユニオンなどが粘り強く取り上げてこなければ社会問題にはならなかったであろう。そうした運動の成果にフリーライドする一方で、ユニオンの存在を軽視し複数組合主義に否定的な立場を取ることはフェアではない。成果だけをとり上げそれを生んだ運動を軽視しているため、本書の提言する諸施策を進めていく主体は、結局のところ濱口氏の理想の中にしか存在しないのではないだろうか。本稿で論じてきたような運動のダイナミクスを捉えきれない濱口氏の議論は、運動なき運動論になっ

てしまっている。

現在の運動の状況と今後の方向性は、「労働運動の社会運動化」と「社会運動の労働運動化」の交差という図式において捉えられるべきなのであり、労働運動だけを見ていては労働運動の変化そのものも

見失うのだということが、本稿の立場である。一方、「労働運動の社会運動化」は、「自らがつくりだした富の分配（大畑・道場・成・樋口編[2004, 23]）という従来の労働運動の主要な関心と齟齬をきたす可能性が高い。そうした課題は「若者の労働運動」においてすでに見られる。その検討については別の機会に譲りたい。